

# Q&A BSE対策見直しに係る評価に関するQ&A

**Q 諸外国の検査体制はどうなっていますか？  
また、米国はと畜頭数に比べて検査頭数が少ないと聞きますがどうしてですか？**

**A** 評価対象国についてはいずれも10万頭に1頭のBSE感染牛の検出が可能な検査体制(国際獣疫事務局(OIE)が示す「管理されたリスクの国」に要求される水準)と同等かそれよりも厳しい基準による検査体制がとられています。  
なお、米国はと畜頭数に比べて検査頭数が少ないのは、高リスク牛に重点を置いた検査体制を敷いているためです。OIEも、死亡牛等の高リスク牛はBSE発生頻度が高いことから、高リスク牛の検査に重点を置いています。

**Q 30か月齢未満で確認されたBSE検査陽性牛については、どう判断したのですか？**

**A** 日本では2001年以降、これまで約1,370万頭のBSE検査が行われ、21か月齢と23か月齢の若齢牛からBSE検査陽性反応が出ました。  
しかし、この2頭はいずれも異常プリオンたん白質の蓄積量が定型BSE牛の1/1,000とごくわずかで、人よりもはるかにBSE感受性の高い牛型遺伝子改変マウスへの脳内接種実験でも感染性が認められませんでした。  
よって、若齢のBSE検査陽性牛2頭に関しては、人への感染性は無視できるとされました。

**Q 日本の全頭検査は不要なのですか？**

**A** 食品安全委員会では、既に2005年のBSEの評価において、BSE対策等の管理措置の状況から、全頭検査をする場合と21か月齢以上を検査する場合のリスクの差は、非常に低いレベルの増加にとどまると判断しました。  
また、この評価結果を受けて、厚生労働省は、既に、20か月齢以下の検査を不要としています。  
さらに、今回の評価においては、日本国内の検査対象月齢について、規制月齢を20か月齢から30か月齢とした場合のリスクの差は、あったとしても非常に小さく、人への健康影響は無視できるとしています。  
食品安全委員会では、さらなる検査月齢の見直し(引き上げ)について評価を継続しています。

## 食品に関するリスクコミュニケーション

2012年9月20日、「BSE対策の見直しに係る食品健康影響評価について」と題した意見交換会を開催しました。

**URL** ホーム>FSC Views>BSEに関する情報  
<http://www.fsc.go.jp/fsciis/meetingMaterial/show/kai20120920ik1>

### 活発な意見交換が行われ、 関心の高さが伺われました

今回のリスクコミュニケーションでは、食品安全委員会のプリオン専門調査会がまとめた牛海綿状脳症(BSE)対策の見直しに係る食品健康影響評価(案)について、酒井健夫座長が説明し、その後、質疑応答が行われました。酒井座長は国内・海外ともに行ってきたこれまでのBSE対策をわかりやすく解説し、最新のデータをもとに、現在はリスクが非常に小さいことを説明しました。休憩を挟んでの質疑応答では、酒井座長に加え、山本茂貴専門委員も登壇し、出席者からの意見や質問に回答しました。7名の質問者の方々から、BSEについての疑問や今後の対策についての要望など、さまざまな質問・意見が寄せられました。質疑応答を踏



まえたパブリックコメントの提出を呼びかけて今回の意見交換会を終了しました。酒井座長の講演および質疑応答は、上記のURLでご覧いただけます。